

仏女新聞

2016年11月号

東大寺ミュージアム特集号です。学芸員の永井洋之さんのお話をうかがいながらめぐると、新しい出会いがありました。ありがとうございます。

東大寺ミュージアム開館は五年前にさかのぼる。ちょうど私が小学校2年生のときだ。110センチくらいの身長だった。展示ケースが高いので、背伸びして見たのをよく覚えている。普通より展示位置が高い理由を当時は知らなかった。

永井洋之さんは言う。「平均身長の人が仏像を見下ろすことにならないように高さを決めてあります。」

今では金堂鎮壇具の展示は上から見るができるが、たしかに、仏像の目は私の目より上にある。仰ぎ見るといった感じだろうか。

寺院らしい心配りは、仏像の目の高さ以外にもむけられている。丸い背中が特徴的な弥勒如来坐像の体軀は小さいが、普通の博物館よりもはるかに大きなケースに収められている。その空間の広さに意味があると永井さんは言う。お堂や厨子はないが、仏像がまとう空間がケース内にある。

仏像は展示されているのではなくて、安置されている。東大寺にはさまざまな様式のお堂や仏像がある。東大寺ミュージアムは二十一世紀様式で作られたお堂なのかも知れない。時間をかけて館内をめぐった。

誕生釈迦仏

東大寺ミュージアムの真ん中のスペースに安置される千手観音の正面に安置されるのは誕生釈迦仏立像および灌仏盤だ。誕生日とされる四月八日に、東大寺では仏生会（ぶっしょうえ）が営まれる。その時に登場するのが誕生釈迦仏立像のお身代わりである。誕生釈迦仏にかける甘茶は「灌仏盤（かんぶつばん）」で受ける。本尊である大仏（盧舎那仏）がとてつもなく大きいためか、誕生釈迦仏も灌仏盤も一般的な大きさの数倍はあるようだ。そのため表情もよくわかる。明るく穏やかな顔に見える。誕生を祝う仏生会にふさわしい表情だと思う。永井さんによれば、移動するときに誕生釈迦仏は男性二人で支え、灌仏盤は男性四人で支えるという。その重さが想像できる。灌仏盤の肌にはさまざまな文様が描かれる。見えにくいところもあるが、よく見ると楽しい文様である。中国風の子どもが走っていたり、そうかと思えばその下方に雲が流れていたりする。散りばめられた文様を一つ一つ眺めていると、いくらでも時間が経過していく。



十二神将の干支

平成二十八年五月二十一日から安置されているのは、青面金剛立像、聖観音立像そして十二神将立像十二体のうち六体である。現在は十二支で子・丑、寅・卯、竜・巳が安置されている。同じような雰囲気像が二体ずつの組になっている。たとえば新薬師寺の十二神将は干支を示す造形がなされているわけではない。それがやがて東大寺ミュージアム十二神将のように頭頂に干支の造形を載せた造形に変わっていく。

干支の造形がかなりかわいらしい。子・丑の神将はとくに表情が陰しく激しいが、頭上に乗った鼠と牛の造形はとびきり柔らかだ。本来、大きく硬い身体が牛が兜につかまろうとしがみついているのだろうか、足を伸ばしている様子が愛らしい。表情の厳しさと干支のかわいらしさのギャップが同時に視界に入ってくる。ギャップの振幅は仏師の力量を示しているように思える。